

復活節特別集会

我は復活なり、生命なり

2019年4月21日 (京都)

奥田 昌道

御霊に燃える あるがままをぶつける 空気と太陽 百卒長とスロ・フエニキヤの女の信 ヤイ
口の娘と血漏の女 我は道・真理・生命 エマオ途上の旅人 我は火を地に投ぜん 凡そ迫害を
受くべし 人を生かすものは霊 訣別遺訓 イエスは甦られた! 「マリヤよ!」「ラボニ!」 見
ずして信する者は幸なり 霊の次元の徴 神・キリストの愛と生命 祈り

●御霊に燃える

私は集会の在り方というか、日曜、日曜の集会でいちばん望んでいたことは何かというと、御霊に燃えるということなんです。御霊に燃えた祈りをするということ。みんな、整いつぎていると思う。もつともつと破れでいい。本当に腹の底から叫んでもいい。主さまに向かつて絶叫するような、そういう祈りでいい。

私は、大学紛争のときに、聖書と讃美歌を持って、若王子山へいつも出かけまして——若王子山の新島襄一族の墓があります、そのもう少し先に行った所に木立に囲まれた適当な祈り場があった——そこで大声をあげて腸の底から全存在をぶつけるように祈った。ということは、どうしても初めは大きな声を出さないと、おさまらないんですよ。それは民家の中ではできません。

それで山の上で大声で祈っていたら、日本画家の大野さんという方がよくその朝来ておられたようで、

「ああ、あなた方は凄いですね」

とか言って感心してくださって、おまけに水墨画をいただいた。そういう出会いもあった。やはり、祈りというのは、腸の底から全存在で——赤ちゃんがむちゃくちゃ泣くでしょう——ああいう破れかぶれの姿をキリストさまにぶつける。そうしたら、スカツとするんですね。そんなことは自分の家ではなかなかできないでしょうから。

私は鈴鹿へ行っているときも、伊勢湾の海辺へ学生を連れて行った。そこで祈りのことは言いませんよ。

「君らの心にあることを全部ぶつけてみなさい。私がお手本を示すから」と言っ

「○○学長のバカッター!」

とか言って大声で叫んだ(笑)。そうしたら、学生もめいめいそんなことを言って、「ああ、スカツとした」



とかいって喜んでいました。なにも私は学長を疎んじたり全然そんなことはないけれども、モデルとしてそうやったわけです。鈴鹿国際大学は丘の上にあつて、非常に見晴らしいのいい素晴らしい所なんです。1.5キロくらい走って行ったら、海辺に到達して、それから海辺をずっと遡って行って、ちょうど川が流れて堤防がある所まで行って、そこで波が逆巻いています。その波に向かって叫ぶわけですよ。そんなことも3年間やりました。

●あるがままをぶつける

小池先生は、人間の在り方として、まず「破れ」ということを言われた。

「人間は破れないとダメだよ。いいかつこうしてたらダメだよ」

と。破れ、それから砕け。そういうことを、あの『無者キリスト』に、「キリストの実存十転」ということと、「人間の实存七相」ということを書いておられた。人間はまず破れないとダメだよ。みんな繕っている。破れてズタズタになつて、砕かれて、それから聖霊の世界へ導かれていくんだということをお書きになっています。

私は、あの小池先生でいちばん尊敬しているのは祈りの姿です。あの祈りは本当に凄かったです。私の家の二階にお泊まりになった時は、先生は朝早く起きて祈りだしたら、もう全身が霊動して、天井が揺れるんですよ。その下に寝ていた妻が驚いて、何が起こっているかと二階にあがつてみたら、先生がそういう状態だったと、そういうことがありました。

「東京ではなかなか祈りに没頭できない」

というようなことを言っておられたけれども、京都へ来たなら何もこの世のいろんなことに妨げられることなく、そこから切断されて、ただただそういう祈りと御言の中に沈潜できるということを非常に喜んでおられた。私の家から鴨川の眺めが素晴らしい。

「私もし動物になるなら鳥になりたいな」

と言っておられた。そういう非常にロマンチックなところがある方なんですけれども。私がいちばん感動しているのは祈りのすがたです。昔、若い人たちを連れて八溝山やみぞという所で断食の祈りの集いをほんの数名でやられた時に、滝に打たれていたら、全員が異言になつてしまったといつて、やはり凄いことが起こつたそうです。晩年は、そんなことをみんなに勧めたりとかは、あまりなさらなかったけれども、やはりそういう祈りの凄さを味わつてこられたというところに本当の素晴らしきがあつたと、私は思つてまして、学びたいとしたらその点です。

だから、この集会の在り方としても、体裁は要らない。それぞれの家庭とか社会では体裁があるでしょう。たてまあと本音もあるでしょう。しかし、集会は主さまに直面しているところです。主さまの前で繕つたつてしようがない。小池先生はいつも、

「あるがまま、そのままをぶつけなさい。祈りだつて、『主さまー!』の一言でいいんだよ。満員電車に乗って吊り革にぶらさがつて、目を閉じたら、そこは聖霊の



「世界だ」

と言っておられた。そういう次元というのは、本当に高い御霊の次元だと思います。私が皆さんに願っている、

「主さまと共に生きる、主さまと共に歩む」

ということは、御霊の主さまと皆さん一人ひとりが一つになってしまうこと。身の回りの問題をひとつひとつ考えたら、大変かもわかりません。けれども、どんなことがあるうとも、

「主さまー」

というその一言に自分を投げ入れ、投げ出して、

「あつ、主と私は一つなんだ。私は主のものだ。われ主の中に、主わがうちに」

ということですよ。

●空気と太陽

簡単な例を申しますと、空気を冥想してください。皆さん、空気から離れて生きていけないですね。

「われ空気の中に、空気わがうちに」

と。気というのは霊に通ずるんです。「ルーアツハ」とかいうそうですけれども。気、空気。皆さん、1万メートルほどの上空に行ったら、気が、空気がなくて大変なんです。1万まで行かなくなったら、3千メートル級の山へ行けば、そこはかなり空気が希薄になっていて大変らしい。それが平地におりますと、そんなことは、皆さん、何も思わないでしょ。でも、

「われ空気の中に生き、空気わがうちに在りて生きる」

と。空気に包まれて、空気を呼吸し、そして日々新たにされていく。

「呼吸」の呼というのは吐く方で、吸は吸う方なんです。いきなり吸ったらダメで、吐いたら入ってくるんです。自分を投げ出したら、気は、キリストが入ってください。そういうことです。水泳をやっているときに、私はそれを教わった。まず吐きなさい、そしてポカッと口を開けたら、空気は勝手に入ってきます。自分を投げ出す、自分を吐く、空っぽになる。そうしたら、新しい生命が流れこんでくる。呼吸ということひとつをとっても、そこに真理がこめられているでしょ。

それからもう一つ。たった一人のご人格のイエス・キリストが、悠久の昔から、そのいらつしゃたときから、地球上のすべての人に生命を与える。そんなことができるのかと。なんぼイエスさまでも無理だろうと、普通なら思いますよね。ところが、私は、

「太陽を見てごらん」

と言う。太陽は悠久の昔から地球を温め続け、照らし続け、生命を与え——石油も石炭も全部太陽がつくり出したものだそうですね——あのたった一つの太陽が、何十億の人間一人ひとりにちゃんと届いているから生きています。世界中がしても、地下だけで生



活した民族というのは多分ないのでないでしょうか。地下に潜っていたら太陽は届かないけれども、外にでたら、届く。そして一人ひとりにちゃんと太陽光線が来てますね。必ず太陽は一人ひとりのところにビームとして来ている。そして暖かくなってゆく。

キリストというのはそういうお方なんです。太陽が悠久の昔からあるように、キリストは創り主、

「万物は主の御言によって成った。光あれと仰ったら光があつた」

と創世記にありますように。御言によって成っていくと、そう書かれてあります。理屈はわかりませんよ。けれども、一人ひとりが外に出て太陽の下にいけば、それがもう実に熱い、燃えるようにこちらを温めてくれる。キリストというのはそういうお方なんです。

地上にイエスとして居られたときは、ナザレにいる方がエルサレムへ飛んでいくわけにはいかない。肉体の限界の中でいらつしやた。時には海の上を歩いたとか、不思議なことはなさいましたけれども。でも、元来は肉体をもっておられたイエスという姿では、そんな空中移動は出来なかつたはずですね。霊化されたら、なさいますけれども。肉体としてのイエスは出来なかつたと思う。キリストが湖の上を歩いてこられたのは、霊化しておられたのではないかと私は思う。山上で祈っておられたら、眩い姿に変貌されるお方でしょう。そうすると、湖の上を波を踏みしめて歩いて来られたというのは、もう霊化しておられた姿で歩いて来られたのではないかなと私は想像している。

とにかく、そういうイエスという方が今も、御霊のキリストとして、太陽のビームが皆さん一人ひとりに届くように、人ひとりの中へ宿ろうとしてください。それを何だかんだと理屈を言い立てて邪魔をする。これが自我なんです。小池先生も言われた、

『はい』と、これでいいんだよ。はいと言えば、それでいい』

と。

「だけど、でもやつぱり」

とか——先生はよく「デモ行進」と言われましたけれども——

「デモ行進ばかりしないで、「はい」と、それで行きなさい」

と。

●百卒長とスロ・フェニキヤの女の信

素晴らしいのは、あの百卒長です。

「御言をください。わざわざあなたが来ていただく必要はありません。御言を

たまわれば、それで僕は癒いよせされます」

と。百卒長は自分のためではない。

「自分の部下が苦しんでいます。お願いいたします」

「ああ、行ってあげよう」



「いえ、来ていただくにおよびません。私はローマ皇帝の権威のもとに百卒長の勤めをやっています。私が部下に行けと言えば必ず行きます。来いと言えれば必ず来ます。それは私が何ものかではない。ローマ皇帝の権威が私を通してそのように働くだけです。あなたは宇宙の神さまの権威者です。僕の所しよこにわざわざ来ていただく必要はありません。お言葉一つを発してくだされば充分です」

と。それに対して、イエスは何と返答されたか。

「イスラエルの中にこんな素晴らしい信仰は見たことがない」

と言われた。百卒長は異邦人でしょ。自分たちはローマの支配下におかれて苦しんでいるわけでしょ。そういういわば憎つたらしいローマの手先である百卒長の部下が苦しんでいるのを、「助けてください」と言われても、「そんなもの知ったものではないよ」なんて、

「私はイスラエル以外に遣つかわされていない」

なんて、ある所で言われましたけれども、そんなことは仰らない。

「ああ、すごい。こんな素晴らしい信仰は見たことがない」

と、そう言つて非常に讃たたえられました。

それからもうひとつ、イエスが讃えられた信仰は、スロ・フェニキヤの女です。ギリシア人です。イエスは伝道で疲れて休んでおられた時に、夜やって来て、

「娘が苦しんでいるので助けてください」

と。そしたら、何と言われたか。

「食卓のパンを犬にやることはできない」

と言われた。これは侮辱ですよ。それに対して、彼女は何と答えたか。

「はい、結構です。食卓のパンをいただかなくてもいいです。でも、食卓から

崩れ落ちるパンくずで充分です」

それに対して、イエスは本当に感動された。

「あなたの信仰は見上げたものだ」

と。その瞬間に娘さんは癒されていたというお話が出てます。

あれを注目してください。百卒長はローマ人でしょ。スロ・フェニキヤの女はユダヤ人ではないですね。そういう、いわば異邦人の中のすじの通つた素晴らしいものにイエスは感動しておられる。イエスの感動されたところでもう御業が成つてしまっている。そういうものに、皆さん、福音書を読まれた時に驚いてほしい。

「願わくは自分もそうありたい。そういう信をもつてイエスさまを受け入れたい」と、そこで祈りに変わる。そういう読み方をしていただきたいんです。



●ヤイロの娘と血漏の女

ヤイロの娘を癒される時もそうでしたね。途中で血漏を患っている女に衣の裾をさわられて、力が出ていった。群衆が押し合いへし合いしている所で、誰だつて身体に当たつてますよ。イエスは、

「いや、私から力が出ていった」

と。見回したら、女性が一人恐れおののいて、

「申し訳ありません」

と。血の汚れを持った女性は聖なる神の前に出られないというモーセの律法がありますから。「でも、私は癒されたい」と。しかも、ルカ伝によりますと、

「多くの医者に多く苦しめられ、何もかも全部すつからかにされた。それでも、病はますます悪くなるばかりであった」

と書いてある。もうそういう切羽詰まった状況ですね。そういう状況の中で彼女はうしろからこつそりイエスの衣の裾に触った。そうしたら、力が流れていって、直ちに血の元が乾いて癒された。イエスも感じられた。こういう世界なんですね。理屈ではないです。全存在で、

「主さまー！ 助けてください」

と、そういう思いをこめて、衣の裾に触ったら、そこへ直ちにイエスから力の生命が流れていって、女性はすつかり癒された。それに対してイエスは、

「あなたの信仰があなたを救ったんだよ。病が癒えて安らかにいらつしやい」

と。そういう励ましという言葉を与えて、別れられたというのが出てきます。

そんなハプニングがちよつとあつたので、ヤイロの所に行つてみたらもうお嬢さんは亡くなつていた。伝令がやつて来て、

「もう先生に来ていただいたいても、無意味です。お嬢さんはお亡くなりになりました」

と。ところが、それを聴いたイエスは、

「ただ信ぜよ。恐るな、ただ信ぜよ」

と仰つた。私に来てほしいと言つておきながら——私が「もうダメだ」と言つたら別ですよ、イエスからすれば——イエスの御意みこころ、御思いもわからないで、

「お嬢さんが亡くなりました。だからもうダメです」

と。こんな失礼なことはないじゃないかと、それがイエスさまのお気持だと思ふんです。そうでしょ。人に頼んでおきながら、途中でギブアップして、

「あなたではもうダメですよ」

なんて、侮辱ではないですか。我々はそんなことをやってませんか、イエスさまに対して、いろんな現象にとらわれて、「もうダメだ」と。現象じゃないですよ、現象がどうであろうと、



お願いしたことは必ず、

「祈りたることは聴かれたりとせよ」

という。現象面が成ろうが成るまいが、そんなことを突き抜けたところで、主と一つにさ
れている。そういう霊的現実の中に一人ひとりが生きる。そういう生き方を、そのための
道を開いてくださったんですね。

●我は道・真理・生命

「我は道なり、真理なり、生命なり。我によらでは誰にても父のみもとに至る
者なし」

とありましたね。「父のみもと」というのは天の次元でしょ。

「人新たに生まれずば、神の国を見ることあたわず。神の国に入ることあたわ
ず」

と言われた。人間が生まれながらの肉のすがた、自己中心で、そういう生まれた姿のまま
でいる、それが「罪」という姿なんです。自我、己、わが思い、そういうものが支配的
であつて、神さまは二の次である。ところが、イエスにとっては、

「主よ、あなたの御意が天におけるように、この私を通して、地に成らしめて
ください」

と、その祈りに徹しておられたから、イエスのなさることは不思議な業がつぎつぎ起こつ
ていく。

「我と父とは一つなり。父の御意なり」

と言われた。ヨハネ伝を見ますと、イエスは空っぽですよ。そして、イエスのご自分の父
のことを

「私を遣わされた方」

という、そういう呼び名で呼んでおられる。

皆さんもイエスさまに出会って、旧い自分に死んでいる。それは自分で死ねない。十字
架で死んでいるんです。死ねない私が十字架で既に死んでいる。捨てられない自分が、十
字架で捨てられているんです。だから、十字架がまず第一です。

「われ主と共に十字架につけられたり。もはやわれ生くるにあらず。復活のキ

リスト、御霊みたまのキリスト、わがうちにありて生き給うなり」(ガラテヤ2・20)

と、ガラテヤ書2章20節。また、第一コリントの1章18節、

「十字架の言ことばは滅びる者には愚かなれど、救いにあずかる我らには神の力なり」

(第一コリント1・18)

と。以下ずっとコリントのところに出てきます。ああいうところをしっかりとキャッチして
いく。聖書というのはのんびんだらりと漠然と読むのではない。ポイントをしつかり把つかま



えて、それを日々の食物としていく。

「我を喰らえ、我を飲め」

と言われた。そういう読み方、食べ方。

「人が生きるのはパンだけではない。神の口から出るひとつひとつの言ことばで生きる」

という。キリストはサタンから誘惑されて、

「石ころをパンにしてみる」

と言われた時に、その言葉をもつてサタンを撃退されました。ヨハネ伝6章にきますと、

「我は生命のパンなり。我をくらえ、我を飲め」

と、くりかえし言っておられる。それは

「私と本当に一つとなれ」

ということ。

「モーセが与えたパンはやはり食べても死んでしまった。でも、私という生命のパンを食べる者は永遠に死なない」

と、ハッキリ言っておられる。永遠の生命。そういうヨハネ伝に満ちあふれている永遠の生命。それから福音書でイエスがなさっているさまざまの御業、そんなものに私たちは日々触れながら、そして主と共に歩んで行くという、キリストと一つなる生活、共なる生活。言葉で祈らなくてもいいんですよ。心の中で、

「主よまー」

と呼びかけていたら、それでいい。そういうふうな、主と共なる生活。これはサンダーシングが自分の本で、

「主と共なる生活は素晴らしい」

というを書いています。新約聖書はヨハネ黙示録で終わっていますけれども、私はいわばサンダーシングなんかは続編だと思う。聖書の続編を自分の生涯を通して、そしてキリストさまと出会ったその間答なんかを通して、続編を書いてくれている。その続編が正しいかどうかは、それが聖書と一致しているかどうかで判別なされればいい。なんか、スエーデンボルクという人が非常に霊界のことを書いておられるようですけれども、ちょっと危ないところがあるとかいうふうに言われています。私は読んでいません。けれども、サンダーシングは本当に健全です。インドの聖者といわれた。そういうサンダーシングというものも皆さんのご参考になさればいいと思います。

以上、話してきたことは全部、予定外のことなんです(笑)。今日の私のメモにはありません。司会者の言葉を聴いていて、ひとりで出てきた内容なんです。



●エマオ途上の旅人

今日の題の、

「我は復活なり、生命なり」

というのは、ラザロを甦らせた場面で仰っている言葉です。それとルカ伝24章は素晴らし
いところですよ。

私が京大で聖書を読む会をやっていたときの会の名前は「京大エマオ会」と名乗って
いました。それは、このエマオ途上でキリストが現れて、聖書を説き明かして励ましてくださ
った。宿に入って、さあこれからパンをいただきましょうという時に、そのお裂きになった姿で、

「あつこれはイエスだ」

と気がついた瞬間に御姿が見えなくなつたとあります。そのようにして、自分たちはな
なか真理を悟れない。イエス・キリストを見失うこともある。けれども、このエマオ途上
の旅人のように——これは都落ちして行つたんですね——そういう都落ちしていく二人の
弟子にイエスが旅人の姿で近づいて、彼らに語りかけ、聖書を説きあかされた。それを聴
いた二人の弟子は、イエスの姿が見えなくなつたあとに、

「そういえば、道々語つてくださった時に、わが心がうちに燃たではないか」
と云つて、すぐにエルサレムに引き返したというのが24章ですよ。

そのルカ伝24章25節に、その二人の弟子は、

「我々が望みとしていたイエスという方が十字架につけられて、あえなく死ん
でしまった。それがどこか、丁重に葬ろうと思つたら、墓の中の死体が見つ
からない。もう踏んだり蹴つたりですわ」

と、そういう調子でね。

「我らはイスラエルを贖うべき方はこの人だと望んでいました」

と、21節にあります。

「それだけではない。今日は三日目なのに、ある女たちが墓場へ行つてみたら、
死体が見つからない。御使が現れて、『イエスは生きておられる』と告げたと
いう。仲間も行ってみたら、正しくその通りでした」

そこまでのことをペラペラしゃべりながら、彼らはイエスが復活されるということを感じ
ていなかったんですね。だから25節に、

「²⁵イエス言い給う『ああ愚^{おろか}にして預言者たちの語りたる凡てのことを信ずる
に心鈍き者よ。²⁶キリストは必ず此らの苦難を受けて、其の栄光に入るべきな
らずや』」

絶対にこうならないではいられないではないかと。そういうことをこの旅人は語つた。

²⁷かくてモーセ及び凡ての預言者をはじめ、己に就きて凡ての聖書に録^{しる}したる
所を説き示したもう。



これだけ旅人が言ってくれても、まだこの二人は気づいていない。「このおつきさんはすごいな。聖書に詳しいな」ぐらいに思ったのかもしれない。

28 遂に往く所の村に近づきしに、イエスなお進みゆく様なれば、²⁹強いて止め
て言う『我らと共に留れ、時夕に及びて、日も早や暮れんとす』乃ち留らん
とて入りたもう。³⁰共に食事の席に著きたもう時、パンを取りて祝し、擘きて
与え給えば、

これはいつも弟子たちの前でやっておられた。「あつイエスだ！」と気がついたら、もう御姿が見えなくなった。小池先生はこの箇所を、

「イエスはどこへ行ったんですか？ 彼らの心の中に入ってしまったんだ」と言われた。今までは外側に見ていたイエスだった。それが「あつ、イエスだ」と気づいたとたんに、中に入ってしまった。そして、彼らはエルサレムにとつて返した。

³¹彼らの目開けてイエスなるを認む、而してイエス見えたり給う。³²かれら
互に言う『途にて我らと語り、我らに聖書を説明し給えるとき、我らの心、
内に燃えしならずや』(ルカ24・25〜32)

だから、集会というものが、御言が本当に語られ、イエスの御霊がはたらいてくだされば、そこに集っていらつしやるお一人おひとりの、

「心がうちに燃えずならずや」

とならなければ、それは集会ではないんです。そうなるには、やはり集会に来るときに、それだけの心構えをもって、

「主よ、どうぞ、あなたに出会わせてください。今日、新たにしてください。切なる思いで参りました」

と、そういう祈り心をたずさえて集会に来てください。そして、
「聖霊の人としてください。そして、私をお用いください。もはや私は自分のために生きるのではありません。あなたのご栄光の証人として私を捧げていきたいと
ございます」

と。それがクリスチャンというものです。そうやっているかということですね、一人びとりが。確かに、集会は心のお互い通じ合う方ばかりが集まっている。居心地がよい。それは事実だと思います。しかし、その中で満足していたのでは、そこから先は何も起こらない。一人びとりが本当に聖霊の燃えている人になることです。

●我は火を地に投ぜん

キリストは言われた、

「此の火すでに燃えたらんには、我また何をか望まん。されど我には受くべき
バプテスマあり」



これはルカ伝12章のところに出てきたと思う。ルカ伝12章49節です。

大事な箇所は、「何章何節」と言えるようになって欲しい。特に司法試験受験の経験のある方は条文を必死になつて覚えたでしょ。「あ、533条は同時履行の抗弁権」とか、そんなことでやったと思う。

私は学生を連れて大文字山に登った時に、上に標高がある。そこに「446m」と書いてあった。「債権譲渡」と覚えなさいと言った。債権譲渡の条文のトップが446条だ。446mは覚えられないけど、債権譲渡と覚えたら、446条だと分かるだろう。それは法科大学院の学生だからそんなことを言っている。皆さんには言いませんよ。でも、皆さんに、

「ルカ伝の何章何節は、あつこれだ」

というくらいに、いわば聖書に習熟してほしい。

「我を喰らえ、我を飲め」

と、キリストは言われたでしょ。聖書は飾るものではない。皆さんの霊の食物である。そのぐらいのつもりで、祈り心で読んで、そして主と一つであるような生き方をしてほしい。私はあまり深く言葉で祈りません。読むことが同時に主さまとお会いし、そして主さまと共に生き、主さまに祈るような、そんなつもりで聖書に接しております。独り身の生活をしてますから、誰にも邪魔されない。

このルカ伝12章49節に、

「⁴⁹我は火を地に投ぜんとて来^{きた}れり。此の火すでに燃えたらんには、我また何をか望まん。

聖霊の火、これを一人びとりに与えたかった。それが燃えてくれていたら、それ以上望むことはない。しかし、その前提が必要なんだ。

⁵⁰されど我には受くべきバプテスマあり。

血のバプテスマ、十字架です。十字架で血潮を流さなければ、聖霊はこない。

その成し遂げらるるまでは、思い^{せま}逼ること如何ばかりぞや。⁵¹われれ地に平和を

与えんために来ると思うか。われ汝らに告ぐ、然らず、反つて分争なり。⁵²今

よりのち一家に五人あらば、三人は二人に、二人は三人に分れ争わん。

そうですよ。家族の中で誰かクリスチャンになると、そこで分裂が起こるんです。それを邪魔しようとする力がはたらく。その時にキリストは、

「我よりも何々を大事にする者は我にふさわしからず」

と言われたでしょ。キリストに本気でついて行こうと思うと、必ず邪魔がはいります。それにひるんだら終わりです。そこを突き抜けて行かないといけない。それをこのルカ伝のこの言葉は指していると思う。

地に平和を与えんために来ると思うか。そうじゃない。反つて争いだ。一家に五人あらば、三人対二人、二人対三人という分裂が生ずる。⁵³父は子に、子



は父に、母は娘に、娘は母に、^{しゅうとめ}姑嬢は嫁に、嫁は姑嬢に分れ争わん」(ルカ 12・49〜53)

と、丁寧^{ていねい}に書いてありますね。

「妻が出てきてないね」

と、小池先生は言われた。とにかく、本気でキリストに従っていけば、必ず邪魔がはいる。分裂が生ずる。そこでひるまないで、突き進む。そしたら、ある時は父母から「親不孝もの！」といった罵られるかもしれない。けれども、それを貫くことによつて、やがて父母を救いあげることになるんです。そういうことを言っている。

日本の家庭では特にそれが大事です。ヨーロッパのようにキリスト教国なら、そんなことは言わなくてもいいわけです。けれども、日本という異邦世界におきましては、家族の中に誰か一人がクリスチャンになるということは大騒動を引き起こすんです。

いや、私も思いましたよ、それは。私は切羽詰まったから救われたのはありがたかった。けれども、日曜日曜に集会に来ないといかん。そんなひどい話があるかと思いましたが。皆さん、そう思いませんか？ 日曜日というのは——もちろん悪いことをするつもりはないですよ——ハイキングに行くとか、スポーツをやるとか、いろいろないわば自分なりの楽しみがあった。それが全部アウト。必ず集会に来なければいけない。大変だなあと、I兄弟に

「日曜日に集会に来ないことは罪なんですか？」

と聞いた。彼は答えてくれないんです、

「そのうちに分かりますよ」

と。ずるいね(笑)。そんなもんですね。

今までと全く生活パターンが変わるんです。だから、ちよつとやそつとで、日本の方々がクリスチャン生活の中に入りこむというのは大変だと思えます。家を捨て、家庭を捨て、夫を捨て、妻を捨て、ということになりかねない。でも、ちゃんとここに、

「五人が、二人対三人、三人対二人に分かれて争う」

と書いてある。そこでひるんだらもうアウト。それを貫いたら、一時的にはいろんな波紋が起こつても、やがてそういう方々を救いあげることになる。そのように思ってくださいね。

●凡そ迫害を受くべし

テモテ書にも、

「およそ、神を信じ、キリストを信じて生きるということは大変なことだ」

と書いてある。テモテ第二の手紙の3章12節、

「¹²凡そキリスト・イエスに在りて敬虔をもて一生を過さんと欲する者は迫害を受くべし。」



と書いてある。誰からの迫害か、それは書いてませんけれども。その前の10節をみますと、テモテに対して、

「10 汝は我が教誨・品行・志望・信仰・寛容・愛・忍耐・迫害、および苦難を知り、

と。これはパウロ自身のこういうことを——テモテはパウロから「わが子よ」といつて非常にかわいがられ、将来を嘱望されたお弟子さんです——あんたは私がこんなことをずつと味わってきたことを知っているだろうと。

11 またアンテオケ、イコニオム、ルステラにて起りし事、わが如何なる迫害を忍びしかを知る。

私がどんな迫害を忍んできたか知っているだろうと。

主は凡てこれらの中より我を救い出したまえり。

こういうふうな自分の経験を述べたのちに、

12 凡そキリスト・イエスに在りて敬虔をもて

信心をもつて、

一生を過さんと欲する者は迫害を受くべし。」(テモテ後書3・10、12)

と。キリストもあの「山上の垂訓」といわれるところで、「迫害を受ける」ということを詳しく言っておられます。

「あなた方は私の名のために迫害される。そのときには喜び踊れ。あなた方の天にて受ける報いは大きいから」

と、そういうことが書かれています。日本人にとってこのクリスチャンとか、キリスト信仰が難しいのは、こういう点にあると思います。

日本人が信心する神さま方は幸せばかりを約束して、決してそんな患難とか迫害とかいろんな災いとか、そんなマイナスのことはひとつも仰らない。つまり、御利益だけを約束なさる。しかも、分業がありますから、総合病院はなくて、いろいろ分業なさって、それのはしごをやっているわけですよ。そういう神さまが日本人に親しみをもたらす神さまなんです。

ところが、聖書の神さまは全然ちがう。まず神さまが第一なんです。人間は二の次です。でも、その神の御意を本当に知れば、我々をどん底の罪から、救い難き罪から、消し難い汚点から全部洗い清めて、新しい生命、聖霊の生命、永遠の生命をくださる。そのために救い主が十字架で苦しんで、我々の罪、咎一切を引き受けて死んでくださった。これが救いなんです。

日本人の方々が信仰なさる神さま方はそのようなお方とは思えないんです。立派な方だったかもしれませんが。



●人を生かすものは霊

しかしながら、こういう根源的な我々の罪、神さまに背^{そむ}いているという姿、自己中心であるという姿そのものが罪なんですね。その存在そのものが逆らっているという根源的な我々の罪。それは自分ではどうしようもない。それを聖書では「肉」と呼んでいます。神中心の在り方、神一切の在り方を「霊」と呼んでいます。

「人を生かすものは霊であつて、肉は役立たない。私が語^{ことば}った言は霊であり、生命^{いのち}である」

と。ヨハネ伝6章63節にあります。3章では、

「人新たに生まれずば、神の国を見ることあたわず。神の国に入ることあたわず」

という。生まれながらの人はどこまでも肉、自己中心で、己に囚われて、それは結局、死というものに行き先はない。けれども、我々からいえば、十字架の贖いを受けて、新しく産み出された、新しく生まれた我は天の人、神の次元に生きる人です。もはや己に囚われない。

「旧^{ふる}きは過ぎ去つた。見よ、一切は新しくなりたり」

と、コリント書簡で言われているような、そういう新しい存在者にさせられました。これは恵みです。十字架が一切を引き受けた。我々のマイナスを全部キリストは十字架で引き受けて、ご自分は地獄に突き落とされて、それでも、

「彼らをゆるしてやってください。彼らは自分自身、何をしているか分からない」

い駄々っ子にすぎませんから、ゆるしてやってください」

と言つて、祈られた。そして最後には、

「わが霊^みを御手^{みて}にゆだねます」

と。その十字架の主の姿を見ていたローマの百卒長は非常に感動したと書いてあります。そういう厳かな主キリストの十字架によつて私たちは一切の背き、罪、旧い我から解き放たれて、そして新しい生命、聖霊の生命をいただいた。これが私たちの在り方なんですね。イエスにとっては、祈っておられたら、直ちに眩^{まぼゆ}い姿になつて天に昇つていかれるお方が、わざわざあのゲッセマネで苦しんで祈られて、そして、十字架を負われて、十字架の上でご自分を献げられた。全部、私たちを罪と死から救いだすため、本当の生命に生かすため、自分を献げてくださった。それが救い主イエス・キリストさまなんです。

こういうお方をいい加減にできるはずがないんです、本当のことを知つたなら。みんな本当のことを分からないから、他人事みたいにしにしか聖書を読まない。

「ああイエス・キリストか、ヨーロッパ人が信じているイエスか」

ぐらいのことかもしれません。日本の知識人で本気でキリストを信じ、キリストに身をゆだね、御霊の人として生きている人がどれだけいるか、私は知りません。法律学者の中で



どれだけいるか、私は知りません。でも、私はこのキリストによって旧い我は葬りさられ、自分でどうしようもない自分というものを片づけていただいた。そして、ご自分の十字架の死で、私がうくべき神の審判を全部引きとってくださって、ご復活なさることによって、

「お前も生きるんだ。われ生くれば汝も生くべし」

と、ヨハネ伝に書いてあります。

● 訣別遺訓

14章からの別れの言葉です。

「19 暫くせば世は復われを見ず、されど汝らは我を見る、

これは復活のイエス、また聖霊となつて宿り給うイエスです。

われ活くれば汝らも活くべければなり。

私は活きる。お前たちも絶対に活きるんだよと、そういう「べければなり」ということ。

20 その日には、我わが父に居り、なんじら我に居り、われ汝らに居ることを汝ら知らん。

父・御子・聖霊そして私たち、四者一体になる。そういうことが起こると約束しておられます。そして、イエスを愛するとはどういうことか。イエスの御言を守るということ。言葉を守るということがイエスを愛するということになるんだよ、ということを次に言っておられます。

21 わが誠命を保ちて之を守るものは、即ち我を愛する者なり。

感情的に、「イエスさま、大好き」と、そんなんじゃない。そうじゃなくて、御言を守る。キリストの言葉を生命よりも大事にする。そういう思いで御言を尊ぶ。そして守る、実行する。そういう者が神にも主さまにも喜ばれる。

我を愛する者は我が父に愛せられん、我も之を愛し、之に己を顕すべし』

「世間には顕されないのですか」なんて、尋ねましたね。

23 イエス答えて言い給う『人もし我を愛せば、わが言を守らん、

つまり、私を愛するとは私の言葉を守るということだと。

わが父これを愛し、かつ我等その許に來りて住処を之とともにせん。

一緒に暮らすよと。

24 我を愛せぬ者は、わが言を守らず。汝らが聞くところの言は、わが言にあら

ず、我を遣し給いし父の言なり。

ここでも「私を遣し給いし父」と呼んでおられます。それから、今まで語ってきたことはすべて、聖霊があなた方に臨むときに、すべて解きあかされるという。

25 此等のことは我なんじらと偕にありて語りしが、26 助主すなわちわが名によりて父の遣したもう聖霊は、汝らに万の事をおしえ、又すべて我が汝らに



言いしことを思い出さしむべし。²⁷われ平安を汝らに遺す、わが平安を汝らに与う。わが与うるは世の与うる如くならず、なんじら心を騒がすな、また懼るな。」(ヨハネ14・19〜27)

もう涙ぐましい言葉でしょ、ここに書かれていることは。

この14章から16章はイエスが弟子たちと別れにあたっての別れの言葉、訣別遺訓と呼ばれています。その冒頭は、

「『なんじら心を騒がすな、神を信じ、また我を信ぜよ。』

と。弟子に語られたのではない。あなたに、お一人おひとりに語っておられるんです。そういうふうを受けとらないと、過去にあの場面で弟子にこう語られたという物語ではない。今この言葉を通して、あなたご自身にこれを語っておられる。

「我を食らい、我を飲め」

と、そう迫っておられると、こういう読み方をなさってください。我々は心騒ぐんですよ、何かありますと。動揺するんですよ。その時にうれしいのは、

「あつ、『汝ら心を騒がすな、神を信じ、また我を信ぜよ』と言ってくれている、ありがとうございます」

と、これが私の心境です。

²わが父の家には住処^{すまか}おおし、然らずば我かねて汝らに告げしならん。われ汝等のために処^{ところ}を備えに往く。³もし往きて汝らの為に処を備えば、復きたりて汝ら我がもとに迎えん、わが居るところに汝らも居らん為なり。

そして、処を備えたら、また来て、あなた方を私のもとに迎えるよ。私はお前たちといつも一緒に居たいんだよと。

「わが居るところに汝らも居らんためなり」

と。一緒に居りたんだよと。そして、

⁴汝らは我が往くところに至る道を知る』⁵トマス言う『主よ、何処にゆき給うかを知らず、いかでその道を知らんや』

「いったいどこへお行きになるんですか」というのに対しては、

⁶イエス彼に言い給う『われは道なり、真理^{まこと}なり、生命^{いのち}なり、我に由らでは誰にても父の御許にいたる者なし。⁷汝等もし我を知りたらば、我が父をも知りしならん。今より汝ら之を知る、既に之を見たり』

「われは道なり、真理なり、生命なり。私に由らなければ誰も父の御許には行けないよ。私を知っているということは、私を遣わされた父を知っているということだ。父と私は一つなんだから」

ということを言っておられます。

⁸ピリポ言う『主よ、父を我らに示し給え、さらば足れり』⁹イエス言い給う『ピ



リポ、我かく久しく汝らと偕に居りしに、我を知らぬか。我を見し者は父を見しなり、如何なれば「我らに父を示せ」と言うか。

「我を見し者は父を見しなり」という。

10 我の父に居り、父の我に居給うことを信ぜぬか。わが汝等という言は、己によりて語るにあらず、父われに在して御業をおこない給うなり。

イエスのなさった業も言葉も全部、父がイエスを通してなさっているだけであつて、イエスご自身は空っぽであるという自覚ですね。そして、

11 わが言うことを信ぜよ、我は父におり、父は我に居給うなり。もし信ぜずば、我が業によりて信ぜよ。12 誠にまことに汝らに告ぐ、我を信する者は我がなす業をなさん、かつ之よりも大なる業をなすべし、われ父に往けばなり。

これはペンテコステ以降、弟子たちはそれを実証しました。復活されたイエス、それが聖霊となつてくだつて弟子たちと一緒に働かれた。その伝道の記録が使徒行伝というところに記されている。それをここで先取りして仰っているわけです。

我を信する者は我がなす業をなさん、かつ之よりも大なる業をなすべし、われ父に往けばなり。13 汝らが我が名によりて願うことは、我みな之を為さん、父子によりて栄光を受け給わんためなり。

そして、私の名前でも——父の名前でもどつちでもいいです——願うことはみんな私が実現してあげる。そのことを通して、神は栄光をお受けになると。

14 何事にも我が名によりて我に願わば、我これを成すべし。15 汝等もし我を愛せば、我が誠命を守らん。16 われ父に請わん、父は他に助主をあたえて、永遠に汝らと偕に居らしめ給うべし。17 これは真理の御霊なり」(ヨハネ14：1

〜17)

「私とは別個に——今生きておられるイエスというご人格とは別個に——助け主という方を与えて、その方はずっと一緒にいてくださるお方だ。これは真理の御霊である」と。それはまだ地上におられるからこんなことを言っておられるけれども、もう天上に行かれてこのペンテコステ以降は、ここで語られたことは全部、聖霊の姿で実現してくださっています。

●イエスは甦られた!

それから、弟子たちのことに話を戻しますと、さっきのルカ伝24章に非常によく表れています。イエスはご自分の受難そして復活を二度仰っているんですよ、福音書の中で。でも、彼らは上の空で聞いていたんでしょね。全然わからなかった。いや、仕方がないですよ。我々は振り返って、

「弟子たちは何で信じなかったの? イエスがあれだけ繰り返し、『三日目に甦る』ということ、異なる場面で三回も言っておられるのに、それでも弟子たちは信



じられないの?」

と、今だから皆さんは言えるけれども、その当時に立ち返って見たら、弟子たちにとっては——死ということは分かります、でも——復活なんていうことは想像もつかない事態でしょ。死んだら墓に葬られて終わりなんです。「終わりの時に甦る」ということはどうも信じていたらしいですね、マルタ、マリヤがそうでしょ。

「終わりの時の甦りのことは存じております。ラザロは墓に葬られています」

「いや、今だ」

と。そうやって、マルタ、マリヤは励まされた、ヨハネ伝11章に出てきてます。そういうことですから、弟子たちが、いくらイエスがご自分の受難と復活、栄光の姿になって甦れることを三度仰つても、それは全然理解できなかったというのが正しいんでしょうね。そして、現実になんかぶつかって初めて、「はあ、そうだったのか」と。実は聖霊がくださったペンテコステ以降にいろんなことが彼らに解きあかされた。そんなふうに思われます。

弟子たちの伝道の眼目は何だったかということを使徒行伝なんかで辿ってみますと、イエスの復活なんですよ。

「イエスは甦られた!」

と、それが彼らの伝道の旗印でした。「死んで墓に葬られたら終わり」というふうに思いこんでいたわけですよ。みんなそうでしょ、

「人間死んだらおしまいや」

と言ってます。ところが、そうでない事態が現実に生じて、弟子たちにイエスは甦れて、彼らを励まされた。だから、弟子たちの伝道はまず、

「イエスは甦られた。イエスは生きておられる」

という、そこから始まっている。

そういうった事態を本当に霊的な次元で深めてくれたのがパウロです。漁師さんであったお魚取りの方々には、深いことをきちつと理解するということは、むしろ難しかったと思う。ただ、イエスの素晴らしさに打たれ、励まされ、

「この方のためなら、命を惜しまない」

という純情さがあります。けれども、最後はみんなイエスを捨てて逃げ去ったし、ペテロにいたっては、

「あんなものは知らん、知らん、知らん」

と三度否んだら、鶏が鳴いたという場面があるように、みんな落第生ばかりなんです。けれども、使徒行伝のペンテコステ以降の弟子たちは別人のごとき姿でイエスを伝えていきました。そして、癒しの業をやっていきました。時には、死人も甦らせています。

ですから、弟子たちにとっては、望みを託していたイエスは十字架で殺されて墓に葬ら



れてしまった、それですべてがもうアウトだったんです。だから、エマオへ二人の弟子たちが旅立って行ったでしょ。誰もイエスが復活されることは信じていない。

「墓に行ったら空っぽだった。誰かが死体を盗んで行った」と、そういうことしか書かれていませんね。

●「マリヤよ!」「ラボニー!」

ただ、ヨハネ伝だけは素晴らしいことを書いてますよ。

「マリヤよ!」

「ラボニー!」

というあの場面。男性はダメです。女性ですよ。ルカ伝で一番先に墓へ行ったのも女性でした。死体がない。それで、天使がこんなことを言ったと、それを伝えただけでも、

「弟子どもはたわごとだと思つて信ぜず」

と書いてある。ところが、ペテロは出かけて行つて、墓を覗いたら、空っぽだった。「ああ不思議だな」と思つて引き返してきた。そんな程度なんです。

ところが、ヨハネ伝20章から読みますと、

「一週のはじめの日、朝まだき暗きうちに、マグダラのマリヤ墓にきたりて、墓より石の取除けあるを見る。²乃ち走りゆき、シモン・ペテロとイエスの愛し給いしかの弟子(ヨハネ)との許に到りて言う『たれか主を墓より取去れり、ともに走りたれど、かの弟子ペテロより疾く走りて先に墓にいたり、⁵屈みて布の置きたるを見れど、内には入らず。⁶シモン・ペテロ後れ来り、墓に入りて布の置きたるを視

布だけが巻いてあつて置いてある。死体はないという。

⁷また首を包みし手拭は布とともに在らず、他のところに巻きてあるを見る。

⁸先に墓にきたれる彼の弟子もまた入り、之を見て信ず。

つまり、イエスはいないということだけは分かった。けれども、復活されたということは全然思っていない。

⁹彼らは聖書に録したる、死人の中よりその甦えり給うべきことを、絶対に甦えり給うということをしる、

を未だ悟らざりしなり。¹⁰遂に二人の弟子おのが家にかえり。

「ああ、先生は死んだだけでない。死体までも無くなってしまった。誰かが奪い取つて行ったんだ。悲しいことだ」と。ところが、マルヤは諦めきれないで、ずっとその墓に居つたという。

11然れどマリヤは墓の外に立ちて泣き居りしが、泣きつつ屈みて墓の内を見



るに、¹²イエスの屍体しかばねの置かれし処に、白き衣をきたる二人の御使、首の方にひとり足の方にひとり坐しいたり。¹³而してマリヤに言う『おんなよ、何ぞ泣くか』マリヤ言う『誰かわが主を取去れり、何処に置きしか我しらず』¹⁴かく言いて後に振反ふりかえれば、イエスの立ち居給うを見る、されどイエスたるを知らず。¹⁵イエス言い給う『おんなよ、何ぞ泣く、誰を尋ぬるか』マリヤは園守そのもりならんと思ひて言う『君よ、汝もし彼を取去りしならば、何処に置きしかを告げよ、われ引取るべし』

せめて遺体を引きとらせてくださいと言った。

¹⁶イエス『マリヤよ』と言い給う。マリヤ振反りて『ラボニ』(釈とけば師よ)と言う。

「マリヤよ」「ラボニ」と。これでイエスだということがハッキリとした。火花した。

¹⁷イエス言い給う『われに触るな、我いまだ父の許に昇らぬ故なり。我が兄弟たちに往きて「我はわが父すなわち汝らの父、わが神すなわち汝らの神に昇る」といえ』¹⁸マグダラのマリヤ往きて弟子たちに『われは主を見たり』と告げ、また云々の事を言い給いしと告げたり。

それで弟子たちは、信じることも信じないとも何も書いてないけれども、ヨハネ伝はそこまで書いてある。

●見ずして信ずる者は幸なり

ところが、その先のお話がまたあります。

¹⁹この日すなわち一週のはじめの日の夕、弟子たちユダヤ人を懼おそるるに因りて、イエスは宗教的な犯罪者として処刑されたわけです。そうすると、イエスを信ずる弟子たちも同じ仲間ですから、これは当然、ユダヤ人からすれば、捕まえたなら処刑するということになる。だから、彼らはユダヤ人を恐れて部屋の中に閉じこもっていた。戸を閉じていたところが、イエスがそこに現れた。

居るところの戸を閉じおきしに、イエスキたり彼らの中に立ちて言いたもう

『平安なんじらに在れ』

「シャーローム」という言葉です。日常のご挨拶になっているそうです。もともとは「平安なんじらに在れ」という、祈りの言葉なんです。

²⁰斯く言いてその手と脅おそえを見せたもう、

手に釘あとがある。脇腹に槍で刺された傷痕がある。それをお見せになった。

弟子たち主を見て喜べり。

それはうれしいですよ。さつき、ハレルヤ・コーラスを歌いましたね。あの歌は素晴らしいですね。皆さん、日常、歌ってくださいね。どんなことがあるうとも、



「主は甦えりたまえり。主は我らと共にいます」と。
「神はわがやぐら」というルターの讚美歌も素晴らしいけれども、あのハレルヤ・コーラスも素晴らしいですね。

²¹ イエスマた言いたもう『平安なんじらに在れ、父の我を遣し給えるごとく、我も亦なんじらを遣す』
ここでハッキリ約束されました。それだけではない。

²² 斯く言いて、息を吹きかけ言いたもう『聖霊をうけよ。これはペンテコステで実現したわけですね。聖霊を受ければ、

²³ なんじら誰の罪を赦すとも其の罪ゆるされ、誰の罪を留むるとも其の罪とどめらるべし』

つまりいわば、神さまの代わりの役目を果たすという。その条件として聖霊を受けることが必要だという。その時に、デドモというトマスがいなかった。

²⁴ イエス来り給いしとき、十二弟子の一人デドモと称うるトマスともに居らざりしかば、²⁵ 他の弟子これに言う『われら主を見たり』トマスいう『我はその手に釘の痕を見、わが指を釘の痕にさし入れ、わが手をその脅に差入るるにあらざれば信ぜじ』

²⁶ 八日のち弟子たちまた家におり、トマスも偕に居りて戸を閉じおきしに、イエス来り、彼らの中に立ちて言いたもう『平安なんじらに在れ』²⁷ またトマスに言い給う『なんじの指をここに伸べて、わが手を見よ、汝の手をのべて、我が脅にさしいれよ、トマスはもう、「すみません！」とおそれいつて平伏した。

信ぜぬ者とならで信する者となれ』²⁸ トマス答えて言う『わが主よ、わが神よ』

²⁹ イエス言い給う『なんじ我を見しによりて信じたり、見ずして信する者は

幸福なり』(ヨハネ20・1〜29)

これですね。

「聖書に書いてあること、そんなものは信じられない。あんな奇蹟は信じないと、みんなこのトマスと同じで、

「自分の目の前でやつてもらわないと、とてもそんなものは信じませんよ」

と。これが普通一般人の受けとり方です。けれども、それに対してイエスは、

「見ずして信する者は幸福なり」

と仰っている。我々が聖書を、福音書を読みますときに、いろいろな奇蹟の御業があります。それを全部そのまま受けとります。しかも、それはしるし徴なんです。

「それをその通り実現してくれ」

といったら御利益信仰になります。イエスはあのようにいろんな人を癒され、死人をも甦



らせた。

「いや、今もやってください。やってくれなかつたら信じませんよ」

と。これは御利益信仰です。そうではない。

「やがて来るべき天国ではこういうことなんだよ、天国の姿はこれだよ」

と、徴として顕された。パンの奇蹟もそうでしょ。五つのパンと二匹の魚で五千人以上の人たちを養われた。これも徴です。イエスがなさっているのは全部、徴なんです。その徴が指し示している奥の事態をしっかりと受けとって、

「肉眼で見ようが見まいが、そんなこととは関わりなく御言は必ず実現します、言葉は必ず成ります」

と。そうやって受けとっていく。それが我々の導かれている信仰の世界です。それは聖霊が働いてくださらなければ、我々の理性は受けとらない。

「聖霊が汝らに臨むとき、あなた方は私の証人になる。全世界に私のことを宣べ伝えるようになる」

と。これは使徒行伝の一番始めのところに出ています。使徒行伝第一章3節、

「³イエスは苦難をうけしのち、多くの慥^{たしか}なる証をもて、己の活きたることを

使徒たちに示し、四十日の間、しばしば彼らに現れて、神の国のことを語り、

⁴また彼等とともに集りいて命じたもう『エルサレムを離れずして、我より聞きし父の約束を待て。⁵ヨハネは水にてバプテスマを施ししが、汝らは日なら

ずして聖霊にてバプテスマを施されん』

これがイエスの語られたこと。

「では、御国を復興されるのはいつですか」

「それは知らない」

と。しかしながら、

⁸然れど聖霊なんじらの上に臨むとき、汝ら能力^{ちから}をうけん、而してエルサレム、ユダヤ全国、サマリヤ、及び地の極^{はて}にまで我が証人とならん』

地の極まで私の証人となつて私のことを世に示していくんだ、と仰った。

⁹此等のことを言い終りて、彼らの見るがうちに挙げられ給う。雲これを受け見て見えざらしめたり。

そして、彼らはずつと祈りをしていたということが書かれています。14節に、

¹⁴この人々はみな女たち及びイエスの母マリヤ、イエスの兄弟たちと共に、心を一つにして只管^{ひたすら}いのりを務めいたり。(使徒行伝1:3~14)

そして、第2章に行きますと、

「¹五旬節の日となり、彼らみな一処に集い居りしに、²烈しき風の吹ききたるごとき響、にわか天より起りて、その坐する所の家に満ち、³また火の如



きもの舌のように現れ、分れて各人の上にとどまる。4 彼らみな聖霊で満され、御霊の宣べしむるままに異邦の言にて語りはじむ。」(使徒行伝2・1〜4)

五旬節の日になって、聖霊が火のごとく降ってきた。ここから本当の伝道が始まったというわけです。

● 霊の次元の徴

そういうことで、本当に福音書、使徒行伝はイエスのなさった御業、御言、そして弟子たちの働きを生き活きと伝えております。

私たちには、さつきから言いますように、同じ事が現象面で起こる起こらない、そういうことではないんです。質的にこういういった事態が本当の神さまの霊の次元で、御霊の次元というのはこういうものだということ。理性の次元、肉の次元ではない。本当の天の次元をこのようにして私たちに解き示してください。そして、

「私を受けたら、同じ質のことが御意によって成就していくんだから、そのことを信じて、祈り、そして証して行こうよ」

と、そう言って我々を励ましてくださる。どこまでも徴でありましたから、

「同じ事が起こらなかつたら、神は働いていない」

とか、そんなふうを受けとつたらダメですよ。現象面で癒されようが癒されまいが、どうであろうが、そんなものを突き抜けて、

「神さまの根源現実においては既にすべてが成っている」

と、そういう受けとり方をしてほしい。それを言ってますのが、たとえばエペソ書です。

それから余談ですけども、パウロが手紙を書いているときには必ず自己紹介している。ローマ書の自己紹介なんて、ずいぶん長い注釈付きの自己紹介です。エペソ書は簡単です。それでもちゃんと、

「1 神の御意によりてキリスト・イエスの使徒となれるパウロ、書をエペソに居る聖徒、キリストに在りて忠実なる者に贈る」

と、こういうふうにご挨拶をやっています。こういうところもやはりきちんと把まえていたいただきたいと思えます。

そこでエペソ書1章3節から、

「3 讃むべきかな、我らの主イエス・キリストの父なる神、かれはキリストに由りて霊のもろもろの祝福をもて天の処にて我らを祝し、4 御前にて潔く瑕なからしめん為に、世の創の前より我等をキリストの中に選び、

天地創造の前から私たちのことをちゃんとご予定になっていたという。

5 御意のままにイエス・キリストに由り愛をもて己が子となさんことを定め給えり。6 是その愛しみ給う者



キリストですね、

によりて我らに賜いたる恩恵の栄光に誉あらん為なり。⁷我らは彼にありて恩恵の富に随い、その血に頼りて

十字架の血です、

贖罪、すなわち罪の赦を得たり。⁸神は我らに諸般の知恵と聡明とを与えてその恩恵を充しめ、⁹御意の奥義を御意のままに示し給えり。¹⁰即ち時満ちて経綸にしたがい、天に在るもの地にあるものを、悉くキリストに在りて一つに帰せしめ給う。これ自ら定め給いし所なり。¹¹我らは、凡ての事を御意の思慮のままに行いたもう者の御旨によりて預じめ定められ、キリストに在りて神の産業とせられたり。¹²これ夙くよりキリストに希望を置きし我らが、神の栄光の誉とならん為なり。

ここで「我ら」と「汝ら」を分けてますけれども、一緒にしていただきたいと思えます。

¹³汝等もキリストに在りて、真の言すなわち汝らの救の福音をきき、彼を信じて約束の聖霊にて印せられたり。¹⁴これは我らが受くべき嗣業の保証にして、神に属けるものの贖われ、かつ神の栄光に誉あらん為なり。」(エペソ1:3-14)

それから更にキリストのことをずつと述べてきて、2章にいきますと、我々はかつては肉の中に、肉の欲の中で過ごしてきた。4節、

「⁴されど神は憐憫に富み給うが故に我らを愛する大なる愛をもて、⁵咎によりて死にたる我等をすらキリスト・イエスに由りてキリストと共に活かし、⁶共に甦えらせ、共に天の処に坐せしめ給えり。

皆さんも甦って、共に天の高みまで行っただんです、神さまの目からみたら。

「身は地上にあつても、あなたの本質はもう既に天の人です、天国人ですよ」

と。そういうふうにはエペソ書を通して、我々に神・キリストは語りかけていらっしやる。私はその通り受けとります。

「肉体を宿として地上に留まっても、私の本質、私の霊は既に主と共に天国にあり、天国人である」

と。そうでしょ。

⁴されど神は憐憫に富み給うが故に我らを愛する大なる愛をもて、⁵咎によりて死にたる我等をすら……⁶共に甦えらせ、共に天の処に坐せしめ給えり。⁷これキリスト・イエスに由りて我らに施したもう仁慈をもて、其の恩恵の極めて大なる富を、来らんとする後の世々に顕さんとてなり。⁸汝らは恩恵により、信仰によりて救われたり、はおのれに由るにあらず、神の賜物なり。

こちらには一切、根拠がない。すべて神さまの一方的な恵み、あわれみ、愛である。それ



が「賜物」ということ。

9 行為に由るにあらず、これ誇る者のなからん為なり。10 我らは神に造られたる者にして、

新しい創造物である。新創造者、新しく創られたる者。そして目的がある。

神の預じめ備え給いし善き業に歩むべく、キリスト・イエスの中に造られたるなり。」(エペソ2・4～10)

あなた方はこういう者である。あなた方の本質はこんな素晴らしいものである。自分の生
まの姿に囚われて嘆くのではないよと。もう古いあなたは十字架で葬られている。それを
パウロが、

「われ主と共に十字架せられたり。もはやわれ生くるにあらず、復活のキリス
ト、御霊のキリストわがうちにありて生き給うなり。今肉体にありて私が生
きているのは、私のために死んでくださったこのお方を信じて、そのお方と
一緒に生きているんだ」(ガラテヤ2・20～21)

と、パウロのガラテヤ書2章20節、21節です。それとこのエペソ書のここで書かれている
こと、これは一致しているわけです。2章の終わりの方にも、

「19 されば汝等は今もはや旅人また寄寓人にあらず、聖徒と同じ国人また神の家
族なり。20 汝らは使徒と預言者との基の上に建てられたる者にして、キリスト・
イエス自らその隅の首石たり。21 おのおのの建造物、かれに在りて建て合せら
れ、いや増しに聖なる宮、主のうちに成るなり。22 汝等もキリストに在りて共
に建てられ、御霊によりて神の御住となるなり。」(エペソ2・19～22)

聖霊さまがあなた方の中に宿ってください。あなた方は聖き宮である。だから、宮を穢し
てはならない。そういうことになっていくと。

ですから、このエペソ書なんかは本当に霊の高み、霊の次元をぶつけてくれているんです。
私たちはそういう者とされてしまっている。これが霊的な根源現実である。今、現象面で
それがどう現れているか、そんなことに囚われるんじゃないと。

● 神・キリストの愛と生命

そういうことで、本当に聖書は——福音書、使徒行伝そして使徒たちの書簡——どれも
これも本当に神・キリストの愛と生命に満ちあふれています。それを受けとらないで、右
往左往してたら申し訳ない。私たちのためにあのように苦しんで、十字架で血を流し、そ
して我々を贖ってください。そのお方が忽然と栄光の姿で顕れてくださったのが、「復活」
と呼んでいる事態にすぎません。あれはキリストの隠された本質がそのまま顕れただけな
んです。聖書では、

「神が御力によって彼を甦えらせた」



と書いてありますけれども、小池辰雄先生は、

「キリストの中の聖霊がそうなきしめた。イエスという方は墓に葬られて死につばなしの方では絶対になかった。ゆえあつて十字架を負われ、ひとたびは死を味わわれたけれども、彼の本質はそれで終わるようなお方ではなかった。忽然として、本来の栄光の姿が顕れた。それを人は復活と呼んでいるだけだ」と仰った。しかも、

「聖書に復活の記事が一つもなくとも、私はそう信ずる」

とハッキリ断言された。1960年の西宮のあるキリスト教会でそう話された。その時初めて私は、

「あつ、復活というのはそういうことなんだ。聖書に復活の記事があるかないかと、そんなことを言っている場合ではない。聖書に復活の記事があろうとなかろうと、そんなことには関係ない。絶対に栄光の姿で顕れざるを得ない。これがイエスの復活というふうに言われているだけの話だ」

と。これが私にとっては、よく世間でいう「目からうろこ」でした。

この「目からうろこ」の原典は使徒行伝ですよ。パウロはアナニヤの按手を受けたら、

「目から鱗の如きもの落ちたり」

とあるでしょ。私はあそこだと思っている。使徒行伝9章、このあたりは本当に心躍りますよ、読んでいったら。アナニヤが示されて、サウロ（パウロ）の所へ行つて按手する。

「¹⁷ここにアナニヤ往きて其の家にいり、彼の上に手をおきて言う『兄弟サウロよ、主すなわち汝が来る途にて現れ給いしイエス、われを遣し給えり。なり鱗の¹⁸こ¹⁹ときもの落ちて見ることを得、すなわち起きてバプテスマを受け、

¹⁹かつ食事して力づきたり。』(使徒行伝9・17-19)

「目から鱗」の原典は、発祥はここだと私はそう思っている。

とにかく、すごい事態です。神さまのなさることは本当にすごい。正にイエスという方は神から遣わされて、人の姿をとつて、あの讚美歌121番の「馬槽のなかにうぶごえあげ」という、由木康さんの作られた讚美歌——日本人の作詞の唯一の讚美歌だそうですが——あそこにありますね。

1 馬槽のなかに うぶごえあげ、

木工の家に ひととなりて、

貧しきうれい、 生くるなやみ、

つぶさになめし この人を見よ。

2 食するひまも うちわすれて、

しいたげられし ひとをたずね、



友なきものの 友となりて、

こころくだきし この人を見よ。

3 すべてのものを あたえしすえ、

死のほかなにも むくいられで、

十字架のうえに あげられつつ、

敵をゆるしし この人を見よ。

4 この人を見よ、 この人にぞ、

こよなき愛は あらわれたる、

この人を見よ、 この人こそ、

人となりたる 活ける神なれ。

と。本当にその通りですね。私たちはこのお方によって生命づけられ、日々このお方が私たち一人ひとりと、

「一緒に生きよう、いつも一緒にいたいよ」

と言って、我々の所に来てくださっている、抱いてくださっている。我々はどう祈ったらいいかわからない。そのときも、このお方が執り成しの祈りをしてくださっている。ローマ書8章の26節からずっとありますように、本当に素晴らしい事態に我々は導かれている。そのことをハッキリと告白していかないといけない。これは告白する者がなかつたら、普通の人は受けとれない事態です。そういうことで、皆さんは証人としての大事な使命を託されているお一人おひとりです。もはや自分のために生きない。

「神・キリストの栄光のため、御意が一人ひとりを通して成るように」

という、その祈りに生きる。これが私たちの生き方です。

では、時間がきましたので、短くお祈りをして、終わります。

● 祈り

主イエス・キリストさま、あなたは死を突破して、その死をもつて我々の死を葬り去り、罪を贖いきり、そして、栄光のみ姿となって顕れてくださった。これが復活といわれている事態でございます。主さま、あなたは父なる神の御意に全く沿いきって、それを成就し、しかも、その究極がああのごッセマネの祈りで示された、

「お前の生命を地獄に突き落とす……」

(以下録音なし)

